

# 国木田独歩の佐伯での生活 (六)

山内武麒

(賛助会員・佐伯市城下東町)

三十日の記には

昨日は日曜日なりき、午前当地の教会堂に出席す。

午後日置氏に誘はれて沙魚釣りに出掛けぬ。沙魚は釣らざりき。刈入れ時の野ら紅葉満つる野らは吾が感情を動かすこと少なからず。

と、ある。この沙魚釣りは女島へ行ったのであろう。以前佐伯で沙魚が一番よく釣れたのは女島であった。灌漑用の池が田畑のあちこちに掘られ、長い水路を通じて池と池とを結んであった。この池と水路が沙魚の釣り場であった。

この日置氏は名を泉と云い、佐伯の名流で鶴谷学館の監事をしていた。

一昨日(二十九日)の晩は理髪店に散髪に行き、そこに集まる人々の世間話を聞いて、本当の社会に近づいた

ような心地がしたと書いてある。理髪店にはよく人が集まり、世間話に花を咲かせたり、将棋の勝負を取巻く野次馬で大騒ぎしたものであった。

次に自己反省をしている。

自分をして有りのまゝに云うならば、自分の心は荒れた野のようである。見わたす限りたゞ漠々としていて寂寥そのものである。自分の心は少しも安んじることが出来ない。足なみは少しもそろわない。自分の魂は自然、人生、人類、神などの問題の中に入出して、ちょっと脱け出すことが出来ない。

自分は神を信じると確信している。しかしその神の前にこの身をおくにふさわしいシンセリテイがない。

自分は自然を思うが、まだ全くその無窮無限の不可思議の中に自分の身を見出すことが出来ない。

自分は人類を思う。真の事実の中にこの身を見出すことが出来ない。その事実をこの自然の中に全然見出すことが出来ない。

自分は人生を考える。しかしまだ深く思うことが出来ない。まだ人生と深玄な自然との調和一致に達し得ない。

自分自身を考える。まだ全然責任あり、力あり、生命ある独立した星として自分を感じることが出来ない。

郊外や山谷を散歩する時に逢うものは、自分に自然と人生とについて何か語るようであるが、まだ何も語ってくれない。

自分はまだ人生の事実に対し深い注意を呼び起こす程進んでいないのである。町の中を歩くと何か自分を刺戟し、自分は周りを見廻すが、まだ何ものをも見ることが出来ない。

と、まだ自分は未熟だと痛感し強く自省している。独歩は反省を繰り返して、毎日々々を意義あるものと考え一歩々々進む生活をしようと念じている。

昨夜は教会に出席して驚意心と題して感話している。次に今日一日のことを反省している。

今日は逝かんとす。夜已に深く時將に十二時なり。

上弦の月静かに東の空に登りぬ寒き光はいとも寂びしく下界を悼むる也。天地一に何ぞ蕭條たるの甚だしきぞ

と、夜更けの情景を述べて

吾今坐して茲に在り。

考ふ可くんば今なり。沈思す可くんば今なり。反省す可くんば今ぞかし

と、思い、今日一日のことを反省している。

自分の生命の今日は逝った。永遠に逝ってしまった。

何の意味があつたかわからない。今日一日の命は何の意味をもつかわからない。人生に意味があるものなら今日には今日だけの意味がなければならぬ。

朝起きて仕事をし、今はその仕事を終えるまで自分は何をしたか、と思い返して、

吾、日光の下に動きぬ。吾、遠山の煙景を望みぬ、

吾紅葉の美を眺めぬ。友に書状認めぬ、父母に金送りぬ。借金返済したり。書籍をあつらへたり。生徒を教

へたり。自然、人類、人生、社会を思ひぬ。而して亦た時に吾自らの為すに足るや否やを疑ひて少しく失望したり。されど直ちに恢復したり。美なる月今吾を照

し、吾之れに對して美を感じる也。

と、今日一日のことを反省して、今日の自分の行為を計算するとこのようである。この中に果たしてどんな意味があったかわからない。と、独歩はいつもこのように反省し、日々を意義あらしめようと願っていたのである。

### 三十一日記

朝日山の端に登り、自然新たに醒め今日の日の事はしまらんとす。知らず今日何事を為し、何事を観、何事を感じず可き

と、朝の心持を書いてある。今日一日も有意義に送りたいと念じつゝ記したのである。

次に人の性について述べてある。

この不可思議な自然の中にあつて、人間は何故何も感ぜず平然としているのだらうか。自然は不思議であるがそれより人の性が一層奇怪である。自分はそうだと知りながら全然この自然の中に自分自身を見出すことは益々奇怪である。

この奇怪な傾向が人がお禽獸とよく似ているわけであらうか。

多くの人々はこの世に生れて死んでいく。人間は人間である。人間であるより外にどうしてもなれない。人類が始まって終りになるまで、この人間界に生れたものはたゞ人間としてこの生命を経過するだけである。自分は人間と生れて現に人間と天地との中に自分を見出ししている。しかし人類と自分とにどんな関係があるか、天地と自分とにどんな関係があるか。凡ての人類は互にどんな関係にあるか。また凡ての人類は各々天地とどんな関係にあるか、全く知らない。

生死の限りなき海、されど其は只だ大海の泡沫の消滅発生するが如き者にあらざる可し。大なる意味あらん。深き意味あらん。然り深き意味あるなり。

と、必ず自分の存在には大きな深い意味をもっているのである。と悟つて、

吾豈に泡沫の一片ならんや。人類の仲間人間として大なる意味を有つて生れ出でたる也

と、自覚して、その意味は果して何かとまた問うている。独歩は思索してこの哲学的な人間論を考へていたのである。

(四)

十一月の記について書く

一日の記には

實際眞実の生活、社会、吾より遠きが如く又近きが如し。人間の事實、吾の眼下に来らんとする如く又煙霧の中に閉じらるゝ如し。

と、眞実の生活、社会、また人間の事實は解るやうで、またよく解らない。それで

吾は見んことを欲す。深く観んことを欲す。而して未だ観る能はざる也。

と、よくよく観察したいと願っているが、まだよく出来ない。と反省している。

次に、

自分は大きな喜びに胸が高鳴ったことはない。喜びに感謝したことも、幸せを深く感じたこともない。これは事實である。悲しむべき事實である。と省みて、

嗚呼深くして淳純なる愛情よ、来りて吾をして躍りあがらしめよ。熱涙をほどばしり出さしめよ。高くして深玄なる自然の美よ、来りて吾をして感謝の絶叫を

以て爾の前にひれふせしめよ。真にして実なる永久亡びざる望よ来りて吾をして小児の如く喜び勇者の如くいさみ進ましめよ。

と、愛と美と希望とを熱望している。

そしてまた、大きな喜びと眞の望みと幸福への感謝の涙がなくて、どうして人の心に自然の活泉や天来の春光を注ぎ込むことが出来ようか。「人間の喜び」「人間の悲しみ」この事實はこの大宇宙に於ける大事實であると考えられ又感じられる。そして

詩とは大なる喜と大なる悲とを記したる者に非ずや。天使の悲みと天使の喜びとを人間界に紹介する者之れ詩人に非ずや。

吾に天使の大なる喜びなくんば之れ吾に低き俗界の喜びあるを示す者に非ずや。

吾に天使の如き大なる悲みなきは吾に下界の狭き卑しき悲みある故に非ずや

と、天使のような純粹無垢な喜びと悲しみが詩である。と言っている。

そして、また次に、自分が大いに求めて止まないの、神は次第にその衣である自然の美を自分の生涯への賜も

のとして示してくれるようになった。

見よ、紅葉の美しさよ。余が弟と共にその傍にそふて歩み、或は橋を渡りて、顧みて、紅色の水、河に湛ゆるを賞し、更にすかし見て青空、青山、緑林と相映ずるを喜ぶを得るが如きは大なる賜に非ずや。或は村落を飾り、町はづれを飾るに小児の群を以てする所の美妙を認め、傾けるを木に支へられし小屋の上を掩ふ柿樹、将に紅熟して枝をるゝばかりにたわむを見て何となく茅屋の民をなつかしく思ふが如き。之れ余が今日の散歩の感情に非ずや。

と、散歩して自然の美を陶醉している。僅か三十分間の散歩ですら忘れることの出来ない記憶に残るものである。と、記してある。

この散歩道は臼坪道の情景である。臼坪川の川沿いのこの道には川沿いに小高い土堤があり、その上に櫺はせの木の並木が、養賢寺の前から明神様の前まで続いていた。この記のように秋の紅葉の頃はとても楽しかった。美しく描写している。この通りの景色であった。独歩はよくこの道を散歩している。そしてその美に酔い、感激し感謝している。独歩の自然観賞はこのようにして散歩から

得ていたのである。

( つづく )

### 表紙解説

## 檜野古庵五輪塔

この五輪塔は本誌六十八・九頁にあるように、竹や雑草に埋もれていたものを、切り払って姿を現わした二基の中の一基である。

その形態から、鎌倉末期から南北朝の作と言われ高さ一m四六cm、石質がよいため破損も極めて少ない。佐伯氏にゆかりの塔と思われるが、刻字もなく、詳細は不明である。尚佐伯氏に関する古文書は当地方には皆無に近い。

五輪塔でこんな立派なもの他になく、文化財指定をしてほしいものである。

檜野地区の永福庵には、立派な仏像が残されており、庭には大きな層塔の基部や、古塔の破損されたものが多く、地区のあちこちにも古塔がある。